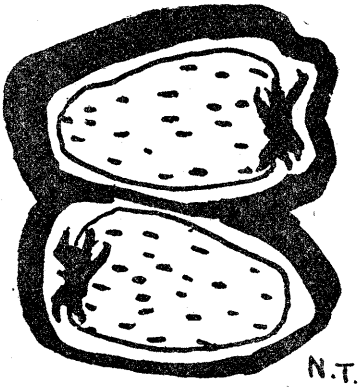
フレーベル以後の幼稚園（4）



津　守　　眞

第二章　幼稚園の発展

幼稚園と教会。「凡そ天地間の万物の中には、一の永久不滅の法則が存在し、これが万物を生かし、且つこれを支配している。……万物を支配するこの法則の根底には、普く万物に通じ、自ら明瞭な、生きた、自覚的な、従つて永久に存在する統一者が必然的に存在する。……統一者とは即ち神である。……自覚力、思考力、理解力などを有つところの人間をして、自覚と自治とを以つて内的法則即ち神性を純粋完全に表現せしめるように刺戟し指導すること、及びその表現の方法と手段とを人に指示すること、これが即ち人の教育である。」（註一）という書き出しから始まるフレーベルの幼稚園教育の古典、「人の教育」は、多分に宗教的色彩を持ったものであつた。のみならず、フレーベルの自伝を見ても明らかなように、フレーベル自身、宗教的な心を持った人間であつた。フレーベルの著書とフレーベル式教育法が極めて重んぜられ、「フレーベル式」が幼稚園の中核をなしていた初期の幼稚園に、宗教団体が強い関心と、共感を示したのはむしろ当然と云えよう。フレーベルの所論は、当然、キリスト教国においては基督教会の関心をひくべきものであったし、基督教会の中に社会的福音の主張が起り、社会悪に対する基督教的積極策が考えられ始めた、十九世紀末にあって、幼稚園運動が教会の活動の一つとして取り上げられるようになったのも、不思議なことではない。幼稚園運動も、前節で述べたように、従来の教育系統の中で、単に年令を引きさげた一学級を作るというのではなく、社会悪に対する救済機関として、又社会改良の一端を荷うもの

として展開された運動だったので、その点でも、基督教会の主張と共鳴するものがあったと考えることが出来よう。

教会によつて立てられた最初の幼稚園は、オハイオ州、トレドのトリニテイ、チャーチであり、第二のものは、一八七八年にニューヨークのアントンメモリアル・チャーチに作られたものである。此の教会の牧師、ヒーバー・ニュートンはフレーベルの心酔者であり彼の幼稚園教育原理に強い関心を寄せていた、初期の幼稚園界において、基督教会がどのような動機と関心を持って幼稚園を設立したかを見るために、ヒーバー・ニュートンの論説から一節を引用して見よう。

「教会の遂行すべき仕事は、社会に新らしい力を与えて社会を再生させ、実際的な博愛主義の事業を通して、それを更に精神的改革にまで高めることであり、そして真の教会の銘記すべきことは、神の力によつて、よりよき社会秩序の生れ生づるのを促すことである。……教会のこのような仕事は、明らかに教育の仕事に属する。すべての愛の営みは、悩みつゝある人間性に向けられて、此の種の博愛事業にまで到達するのである。いろいろの社会悪と接した人々の経験は、唯一つの結論に達する。それは、予防は治療よりもよいということである。予防とは――教育である。衛生改良家、監獄改良家、禁酒主義者、慈善事業家、宗教家、こういう人々が一様に一つの叫びを挙げている。――教育せよ、と。我々は、既に悪く作り上げられてしまった人々を、再びよくするということに対して希望を失ないかけている。彼らはお情けで人間と呼ばれているにすぎないような不幸な怪物とすら思える時がある。そして、一つの希望は絶えず新らしく生れ出づる、まだ汚されていない生の材料はその出発点においてずっとよく作られているということである。」（註二）

こゝで主張されていることは、前節に挙げた幼稚園連盟の幼稚園設立の主張と根本的に全く一つのものであることを見ることが出来る。牧師、ヒーバー・ニュートンの此のような主張の上に、一八七八年の或る日、アントンメモリアル教会に婦人会が招集され、エリザベス・ピーボディが講演を行ない非常な感銘を与えた。直ちに幼稚園設立のための寄附金が集められ、一年間実験的に幼稚園を開設するだけの金額が集められた。マダム・ベルラの保母養成所から若い卒業生が選ばれ、特に貧しい人々の子供を対象とした無料の実験幼稚園が開設された。教会の多数の若い婦人達が無給の助手として志願し、日曜学校の部室が幼稚園にふりむけられ、実験幼稚園は成功を見た。

こうしてその後各地に設立されていった教会の幼稚園は、その主張において前節のフリーキンダーガルテンと同様のものが多くあったが、又教会独自の性格をもっていたことも見逃すことは出来ない。トピカの教会のチャールス・シェルドンは、「子供達のためになされる教会の事業はそれによって子供の生活と教会の生活とを合致せしめ、将来の教会の支持者達を養成してゆくということを考える時、何故にもっと早く教会が幼稚園をとり入れなかったかということは不思議な位である。」（註三）といっている。一つの社会的機関が自己の生命維持の機能を持つことを欲するのは当然であるが、こゝに宗教機関の世間から受ける誤解の源も存するのであろう。他方、幼稚園教育が、教会の従来の教育機関である日曜学校に与えた

影響も見逃すことは出来ない。即ち、幼稚園の教育の内容をなしていた唱歌、遊戯、絵本、お話などが教育の形式的教授に代ってとりいれられるようになった。

幼稚園に対して教会が関心を示したのには、尙他の社会的理由もあった。それまでも教会の経営する宗教学校が数多く存在したのであるが、次第に一般教育が普及するにつれ、又公立の学校がその内容の充実するにつれて、その教授内容において宗教学校が公立学校にたちうち出来なくなるという事情が出て来た。教会は公立学校の与えることの出来ない宗教教育を与えることが出来、その点では他の種類の学校よりも遙かにすぐれていたであろうが、教科の面では公立学校の方がその技術も内容もすぐれたものとなって来た。そして十九世紀の末からは人々はよりよき教授内容の方を躊躇せずに選ぶようになった。教育に対する信頼を強く抱いた近代人にとっては宗教教育よりも、すぐれた一般教育を与える公立学校の方が魅力的であるという傾向を生んだのである。再びヒーバー・ニュートンの言をかりるならば、「人々は公立学校制度に全く信頼をよせ、宗教的宗派に属する学校に好意を持たなくなった。そこで、宗教団体は公立の学校に代りうる教育機関や、単に一部の人々にのみ役立つ学校を作るよりも、公立学校の足りない所を補い、而も全体の人々を益するような教育機関を作る必要を感じたのである。」（註四）そしてそれが幼稚園教育であった。

一九一二年の統計によると、教会によつて設立された幼稚園の数は米国全国に一一八あり、私立幼稚園全体の一二パーセントを占めている。（註五）所がその数はその後次第に実数において減少の傾向を示し、一九二三年には一〇二で、全私立幼稚園の八パーセント、（註六）一九四二年の統計では更に減少している。公私立全体の比率から見れば、その減少は更に著しい。米国における此のような宗教幼稚園の減少の理由は、第一には後章に述べるように、近年における公立幼稚園の著しい増加によるものであろう。丁度小中学校が殆ど公立にきりかわったように、幼稚園もその道を辿った。人々は一般教育はむしろ公の手に委ねる方が望ましいと考えるようになつてきた。そして宗教団体は、幼稚園に注いだ情熱を、（純粋にそのようなものの存在した所では）他の社会的活動に向けて行った。というのが米国における現状である。社会事情の異なる所では当然異った道があって然るべきであろう。その場合に問題になることは、以上の点からも指摘されうるように、一般教育としての幼稚園教育の要請を、内容的に技術的に十分に充すことと、宗教的関心を純粋に伸ばすこととであろう。

註一　フレーベル、「人の教育」小原国芳訳、イデア書院、P1—3、

註二　Newton, R. H. : The Free Kindergarten in Church Work, In, Barrard's Paper, 1881, p. 704～730

註三　Vandewalker, N. : The Kindergarten in American Education 1908, p. 84.

註四　Newton, R. H. 前掲書

註五　V. S. Bureay of Education Bull. 1914, No 6,

註六　V. S. Bureay of Education Bull, 1925, No 20